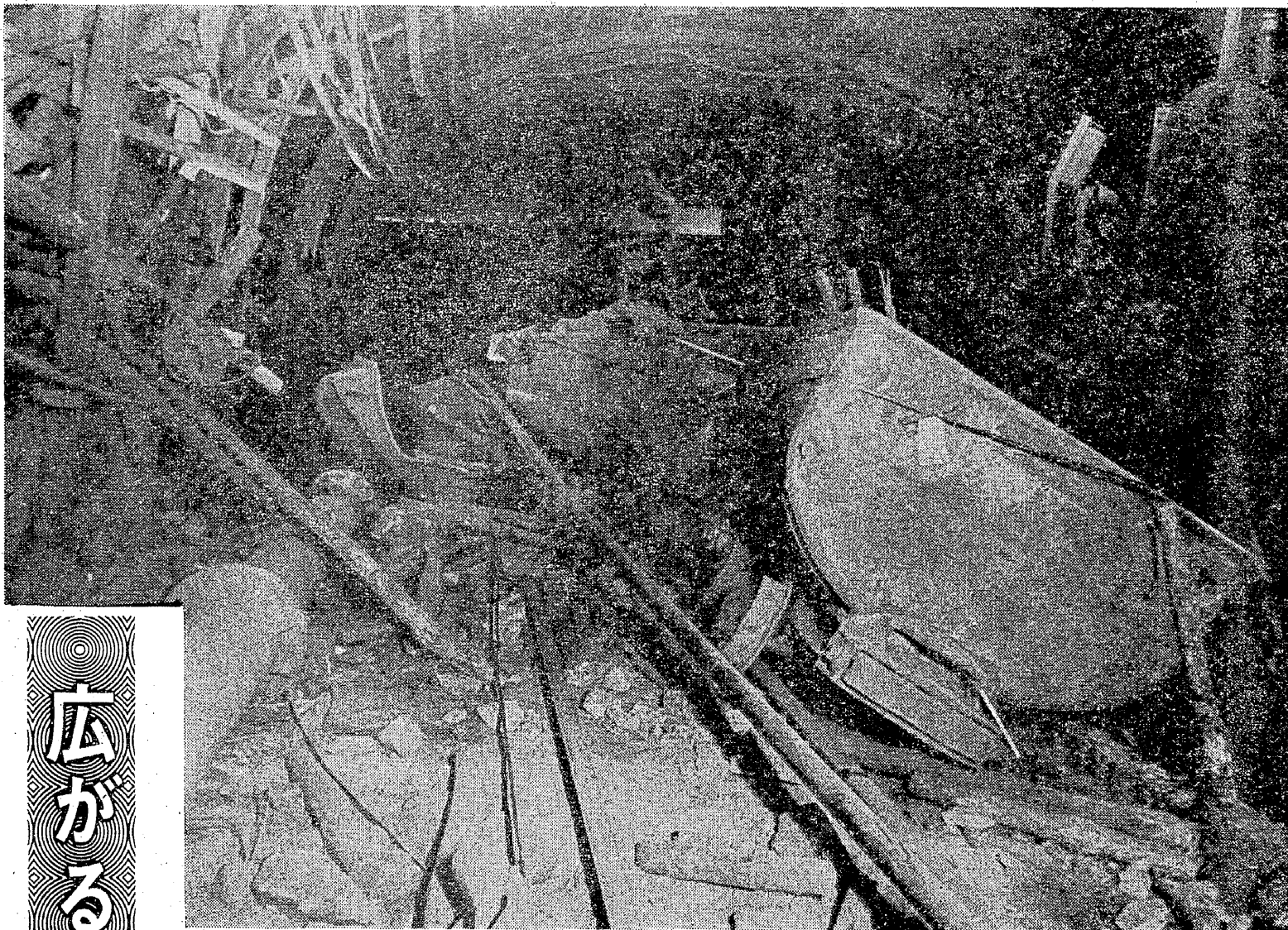




発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町2
電話(53)3033番
(53)3034番
編集兼
発行人 前川 哲也
半年間1,200円 送料共

三池大爆発から16周年



昭和38年11月9日、午後3時15分。三川鉱で炭じん大爆発。暴走炭函(写真)による火花が引きガネだつたとされているが、そのためこの奥で、一瞬のうちに458人の労働者の命が消え、839人にもものぼるCO患者(一酸化炭素中毒患者)がつくり出されたのだつた。ここは爆発中心地点。

命を守る闘い今後も

大爆発の日抗議集会開く

今も変わることなく、各鉱の坑底で重大災害が相つづくなか、三池労組は積もる怒りをこめ、三池大災害(三川鉱炭塵大爆発)十六周年を迎える。十一月九日の当日、組合はストライキに突入り、「三池大災害十六周年抗議集会」を開き、組合員・家族、それに大災害裁判原告団らが結集、毎年この日、命を守る闘いを中心とする諸闘争へ決意を固めることを期している。

今も忘れられぬ

その日の記憶

炭じん大爆発は、何といっても忘れられぬできごとだ。大爆発の日から十六年たった今でも、CO患者たちは死ぬまで消えぬ中毒症に悩まされながら、家族死者と、多数の重傷者を出したとまったく同じ日——昭和三十八年十一月九日に重なるってぼろぼろした。

それは明らかに、当時ひたひたとすすめられていた経済高度成長政策のもと、恐るべき本質をのぞかせたできごとだ。それだけに炭鉱労働者ばかりでなく、全国民をもふるえあがらせた記憶が今もたぎらまなまします。

集会を機に強めよう連帯を

三池労組は、三池大災害の当日、大牟田市民会館で、例年の通り抗議集会を開く準備を進めている。集会はその日午後一時から開催の予定で、組合はあらゆる人びとの参加を希望している。

すでに組合は、総評、炭労、福祉などの参加がまわっている。

四山・三川で重大災害

同じ日重なり、2人重傷

災害が相つづき三池炭鉱で、またも、しかし同じ十月二十五日に重大災害が重なって起きた。三川鉱(平瀬哲陽鉱長)の仕繰工の伊牟田孝助さん(五十四歳)が、坑底の乗車道横で手を洗い終ったところへ、差しかかってきたエンドレスの台車が、その体を車輪の下に巻きこみ、重傷を負った。

同日、四山鉱(小林昭二郎鉱長)の、三井建設の組長の梅田美知夫さん(四十歳)も、坑内で右後頭部頭蓋骨骨折・脳挫創の重傷を負った。

切羽の詰りに向かって走っていたSDL(ボタ積みダンプ)のホースがものにつかかると、そのため機械の部品がはずれてハネ、梅田さんの頭にたたかたかぶつた、と見られている。熊本大学附属病院に送られ加療中だが、危機が残るのではと心配されている。どちらも明らかに、保安管理上の環境の悪さが問題だが、組合はこれから会社に対し、保安上の改善について厳重に申し入れることになっている。

新年文芸を

▼本紙を読んで下さっている皆さん、新年文芸を寄せてください。案内は前号に。

広がる連帯で追及しよう、災害責任

争を中心とする命を守る闘いを続けている。闘いはこれからも続くことは必至で、組合員と家族、それに原告団は抗議集会を機に、改めて全国から寄せられる支援に感謝するとともに、職場で地域で、闘いを強める決意を固めるのである。

早くも、その日を機に当地で開かれる、三池にまなぶ全国集会、参加者を呼び、社青同、同全国などの参加がまわっている。

八〇年代が、すぐそこ待っている。連帯の輪が広がってこそ、基本的に情勢を変えることも可能となる。